

「幸せってなに？」 矛盾から入る国際理解 (どの地域でも実践できる方式の紹介)

JUNJI HORI

堀 純児

社会科

岐阜県多治見市立北陵中学校

1 プロローグ

夕暮れ、ふとホテルの外にでて歩き出していた。ラオスの街角で何かに出会いたいという強い望みがそうさせたのだろう。何時間歩いたろう。私はいきなり足を止めた。「これだ。私の望んだ光景が目の前にある。」私は夢中でカメラのシャッターを押した。少女がぼつんと路上に立っていた。その手前には真っ赤を通り越した深紅のガソリンを入れた瓶がたった1本木製の椅子に置かれていた。

「ガソリンを売る少女。」私はラオスで子どもの表情を撮りたいと強く願っていた。しかもラオスをたった1枚で表現できるような1枚を。その1枚を現実のものとした一瞬である。

さらに欲がでた。ガソリンを売る少女のりりしい笑顔の答えとなる写真がほしくてたまらなくなった。探し続けついにそのチャンスにであった。路上でたった数個のタバコを7人の家族総出で売っている。私は、つい誘われて「1個下さい」と声をかけた。手渡されて、子どもの表情をうかがった。子どもの笑顔がはじけそうでまばゆかった。私の脳裏に焼き付いて離れない。

この2枚の写真で必ず授業を仕組もう。授業題名は「幸せってなに?」。こうして私はラオスに居ながらにしてすでに授業の重要なポイントを自分のものとして手に入れたのである。

2 実践の概要

(1) 対象生徒

1年生	2クラス	各36名
3年生	選択クラス	32名

(2) 実施科目

1年世界地理	3時間
3年選択	3時間

(3) 展開

① 単元課題「幸せってなに」

② 紹介方法

説明文、展開、資料の3つが融合し一つになった実践紹介を目指した。なぜなら、忙しい中見ていただくために、授業展開がひと目で分かるものでなければ、結局誰にも見てもらえないと考えたからである。

③ 展開の基本

どの地域でもできる方式紹介を目指した。ラオスで授業展開をする時のみ利用ではごく少数の人しか活用出来ない配慮による。

●第1時間目

学習活動

I どの地域でもできる方式その1
同世代の子どもの矛盾した写真の比較で導入

① ラオスの子どもの写真2枚を比較してみよう。



ガソリンを売る少女
寂しそう つらそう

→

矛盾



笑う子どもたち
楽しそう うれしそう

ラオスの子達は、幸せだろうか？ 不幸だろうか？

II どの地域でもできる方式その2
幸せ条件カード（ランキングシート）の活用

② 幸せの条件をカードから探してランキングをつけてみよう。
(車・CD・ファミコン・テレビ・教科書・薬・風呂等多数)

安心な水

学校

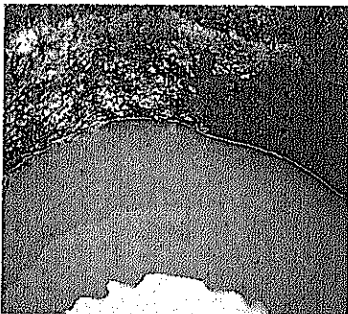
病院

森や木

電気

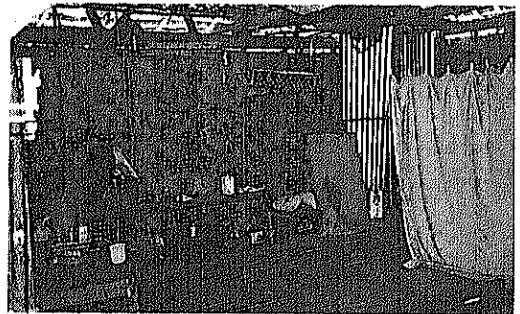
トイレ

③ ラオス にあるか探してみよう。



村の井戸

ふたもなく浅く地上の汚物・伝染病菌が
混入する可能性のある水



家の内部

煮炊きにまきを使用 電気もトイレもない家

次の時間に幸せ条件がラオスにあるかもっと見つけたい、調べたい。

●第2 時間目

学習内容

① 幸せ条件がラオスにあるか調べよう。

学校



交通



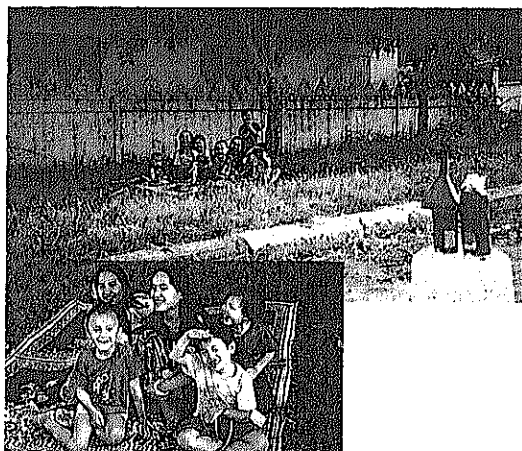
幸せ条件がほとんどないのに子どもたちはどうして笑っているのだろう。

② もう一度写真を見て考えよう。

ガソリンを売る少女②



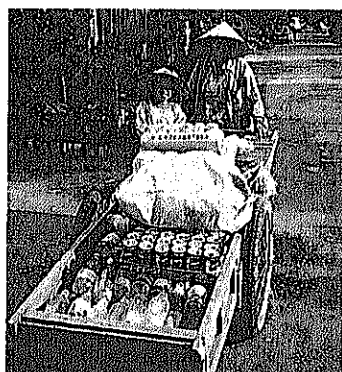
ガソリンを売る家族



タバコを売る家族



あき缶・あきピンを回収する親子



支え合う家族に幸せがあるようだ
物は少なくても、ラオスに心を学ぶことは多い。

Ⅲ どの地域でもできる方式その3
あなたはなにをしますか（アクションプラン）

- ③ ではこの国の子供たちは、このままの状態でもいいだろうか。
なにかするとしたら、あなたは何をしますか。

● 3時間目

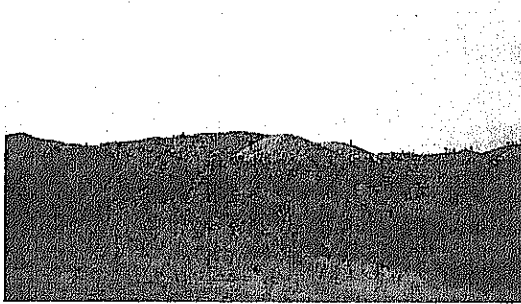
学習内容

Ⅳ どの地域でもできる方式その4
日本の援助と現地の人々の反応の矛盾比較

- ① 日本の援助と現地の人々の考えを比較してみよう。

日本の援助 はげ山

現地の人たちの要望



焼畑による森林破壊を防止する JICA の植林活動

植林技術の指導



栽培技術指導 JICA FORCAP の活動

植林より栽培技術の指導を

矛盾

他国への援助は、現地の人たちの理解がとても重要である

- ② 幸せって何だろう？

支え合い学び合うことが、幸せにつながるんだ

4 授業後の生徒たちの反応

- ・ラオスは、子どもまで働く貧しい国と思っていたけど、家族の助け合いがあつていいなと思った。
- ・電気がない国があるので、これから電気を大切にしたい。
- ・日本がいいと思う援助も、現地の人にはなかなか理解されないことが分かった。しっかり考えを伝えながら続けてほしい。
- ・青年海外協力隊に興味を持った。僕も将来勉強して、活躍したくなった。

5 開発教育に向かうあなたへ

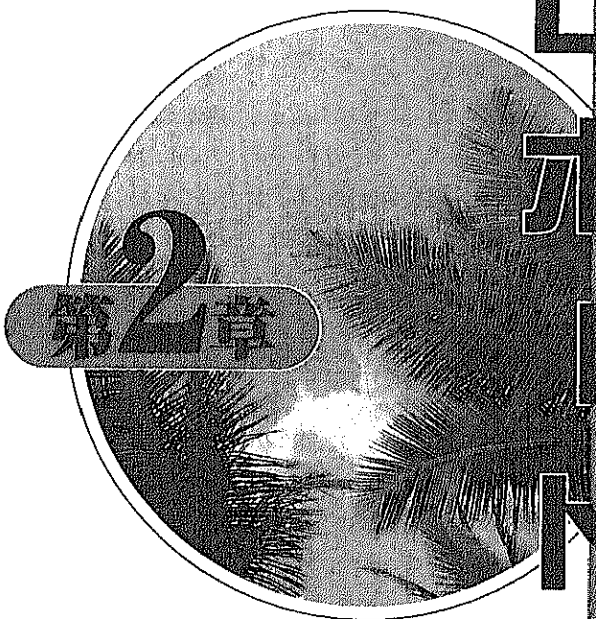
とかく先生は教えたがる。まして自分で行った国のことなどいくつでもエピソードとともに驚いたことに感動したこと学んだことを伝えたい。しかし待て、そんな知識なら、テレビのスイッチを押せば洪水の如く映像が専門的説明付きで流れている。なのに生徒たちはそのチャンネルをすぐに変える。いや自分で見てきたことだから違うと息巻く。ではどこの誰がすべての国を知っているのだろう。知識への知的好奇心は生徒にあるはずとも。ではなぜ目の前のそこに私語をし、あくびをする生徒がいるのか。テレビと違う大きな点は、自分が考え、自分で謎を考え調べ解きあかしていく中に自分に充実感を感じる時間の流れにある。

その自分に充実感を感じる時間こそ生徒に保証すべき教師の使命と最近とくに感じている。その答えを東京研修で与えられた。参加型学習、アイスブレイキング、ランキングシート、アクションプラン。このすべてが自ら考え自ら解き明かして行く力となる。

今回授業実践紹介においてこの参加型学習を授業の流れの中で理解できるよう熟慮した。しかし授業パターンやテクニックにのみ頼っても、授業は形骸化するのみである。そこで、開発教育において、生徒の思考過程からなにを生徒に示し、なにを問い続けるかが興味の連続を誘う大きな鍵となる。その少々の解答をこの実践紹介の中で視覚的に、時間的に示したつもりで

ある。広い意味で「百聞は一見にしかず」なのである。たくさん聞いてもだめ、自分で一見（考える、調べるを含む）すべき授業が私の理想だ。

研修レポート



第2章

ベトナムの学校と中学生について

RICHIKO ONO
大野理智子

英語科
稲川町立稲川中学校

1 はじめに

ベトナムの中部の都市フエという町にストリートチルドレン救済のための「こどもの家」という施設がある。ベトナムには現在5万人のストリートチルドレンがいるといわれる。ドイモイ政策の中でもこの国の貧困問題はまだまだ深刻である。経済のドイモイを進めるためにもそれを担う人材が必要、ということで学校教育の内容も大きく変わってきてはいるが、すべての子どもたちが学校に行けるようになるにはまだ時間がかかりそうだ。

2 ベトナムの学校

(1) 学校・教師・生徒

ベトナムの多くの学校は午前か午後の二部制になっている。一つの校舎が午前と午後で違う学校名になるということもある。したがって教師も半日の午前か午後しか働かせてもらえず、給料はきわめて低い状態である。ほとんどの人が家庭教師や塾の教師などのアルバイトをして生活を支えている。農村などでは教師に対する地域の援助が必要な状態である。しかしながら教師は大変尊敬される存在であり、年に1回「教師の日」というのがあって、生徒や保護者が教師に贈り物をしたりして感謝の気持ちを表す。学校の設備もまだまだ整っていないとは言えず、中等学校までの学校はテーブル、イス、黒板がある程度である。教具も視聴覚

教材、理科の実験設備などもないので、教師は自分で教材を作って教えなくてはならない。

そんな環境の中でも生徒たちは驚くほど真剣に、そして向上心を持って勉強している。授業は整然としていて、どの生徒も教師の説明に熱心に耳を傾け一生懸命にノートをとっている。積極的に質問や発言をする生徒が多く、夏の暑い中でも生徒の元気な声が教室から聞こえてくる。

(2) 時間割

ハノイ市内にあるチュンブオン中学校の時間割（9年生）の例

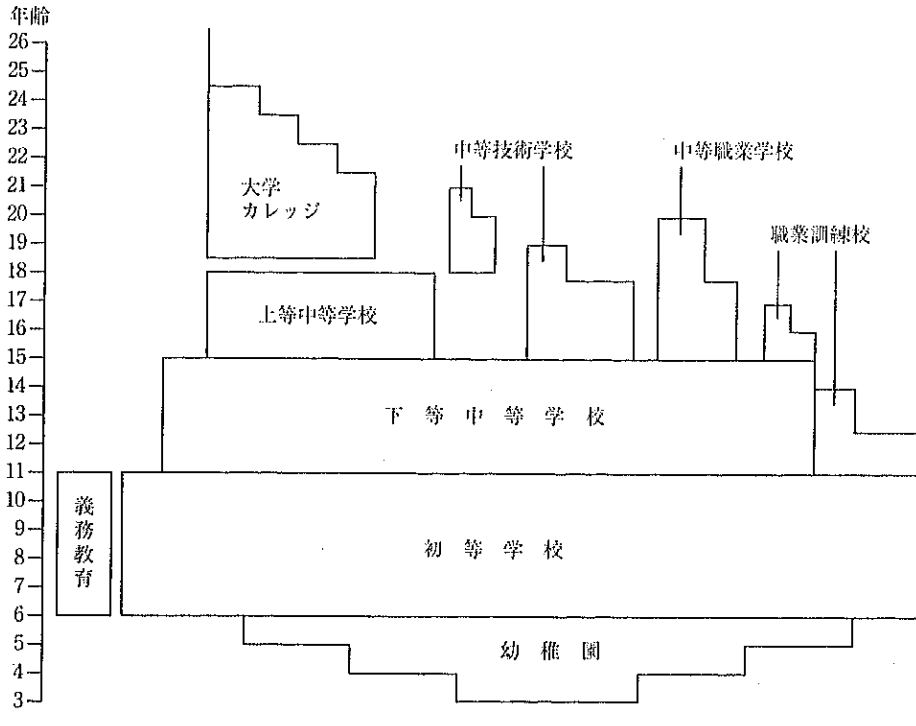
	月	火	水	木	金	土
1	諸活動	文学	歴史	数学	化学	数学
2	地理	文学	英語	物理	体育	数学
3	文学	職業	生物	化学	文学	生物
4	歴史	英語	数学	英語	文学	英語
5	選択	物理	数学	生物	英語	英語

日本と同じように、学級ごとに時間割が組まれている。英語教育は幼稚園や小学校から取り入れているところもある。1日5時限（45分授業）で、土曜日も学校がある。

(3) 学年・試験・制服

ベトナムの義務教育は6歳から11歳までの5年間、その後、下級中等学校が4年間、上級中等学校が3年間となっている。（表1）それぞれ上級学校に進学するときには全国共通の修了試験があり、それに合格す

<表1>ベトナムの学校教育



ると修了証が授与される。新学期は9月から始まり、毎年5月から6月にかけて小・中・高・大学でそれぞれ卒業試験が行われるが、この試験に合格できないと進学できない。また各学年の終わりにも試験があり、不合格の生徒は夏休み中の補習後、追試を受ける。それでも合格できない場合は留年となる（小学校には落第はない）。夏休みは学力の低い生徒のための補習の他に、成績優秀な生徒のための特別講座も設けられている。このようにベトナムの学校では進級・進学が難しいこともあり塾に通う生徒も増えてきている。

ベトナムの多くの学校は制服がある。男子は白いシャツにズボン、女子は同じく白いブラウスにスカート、男女とも胸に赤やオレンジの小さなスカーフを下げている場合が多い。上等中学校になると、ベトナムの民族衣装であるアオザイ（制服のアオザイは白と決まっている）が制服だったり、中にはノン笠をかぶって登下校する姿も見られる。アオザイを着た生徒たちは上着の裾をヒョイとまくって自転車にさっそうと乗って登下校している。



JICA のプロジェクトと青年海外 協力隊など ODA の実態と感想

SHINGO ONODERA

小野寺新吾

英語／理科

岩泉町立大平中学校

1 日本のヴェトナムに対する政府開発援助の概要

日本のヴェトナムに対する援助は歴史的に大きく4つの時期に分けられる。

第1期は旧南ヴェトナムに対する援助であり、発電所建設やチャーライ病院などに対する資金協力などを行っていた。第2期は1975年のハノイにおける大使館建設以降1978年までであり、経済の復興と発展を目的に無償援助と借款、あわせて約280億円を援助した。第3期は1978年以降のカンボディア侵攻から1991年の期間であり、国際的な緊張関係の中でその範囲が医療・災害援助などに限定されていた。この時期には援助が停滞していたといえる。

現在はこれらに続く第4期にあたる。1991年のパリ和平協定署名以降、ヴェトナム政府と緊密な対話を重ね、援助を本格化させてきている。この間、発電所や道路の整備といったインフラの整備、医療や文化関連機器の供与に加え、ヴェトナムからの研修員の受け入れや専門家の派遣といった人的な交流にもその範囲を広げてきている。援助分野の拡大に伴い、これらにかかる予算も増加し、1991年から1997年までの累計は有償資金協力で約4000億円、無償資金協力で約600億円、技術協力の分野では約150億円に達している。

また近年、青年海外協力隊もヴェトナムに派遣されるようになり、日本語教師としてホーチミン、ハノイといった大都市周辺で活躍している。

2 ODA の実態と感想

1999年8月の時点でヴェトナム国内で実施されていた事業の内容はつぎの通り。

派遣事業 (10名)：林業開発計画、法整備、税関政策および税関行政、道路建設機械の運点保守、農業開発のための個別計画、製鉄業近代化、交通政策・交通計画、工業所有権、大学における農業教育、農業協同組合の組織運営・制度

医療協力 (7名)：チャーライ病院、リプロダクティブヘルス事業、企画

農業開発協力 (3名)：ハノイ農業大学強化計画

林業水産開発協力 (4名)：メコンデルタ酸性硫酸塩土壌造林技術開発計画

鉱工業開発協力 (5名)：情報処理研修

青年海外協力隊 (10名)：ハノイ貿易大学、ハノイ外国語大学、国家大学外国語大学、国家大学人文社会科学大学、タンロン大学、日本語研究センター

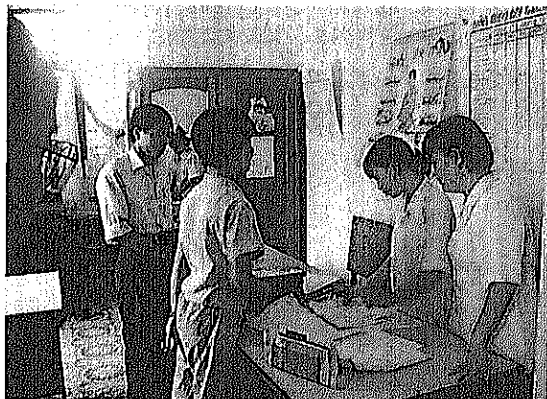
北のハノイから南はメコンデルタまでこれだけの人数がヴェトナム全国に配置されている。これらのうち、リプロダクティブヘルス事業に派遣された専門家と国家大学外国語大学の青年海外協力隊員の様子を紹介する。

①「おしん」より有名な一代さん

ベトナムでは低予算で全国民をカバーする保健医療行政が行われてきたため、医療従事者は十分な訓練を受けておらず、乳児死亡率は32.6%（1995）、妊産婦死亡率も100前後という現状があった。この現状を改善するため、住民に安全な出産育児の情報と教育が施されるように地方の保健所を指導し、必要な機材を供与してこうとするのがリプロダクティブヘルスプロジェクトだった。

実施機関であるゲンアン省は首都ハノイから車で南に4時間ほどの所に位置している。地域に大きな産業がなく、住民の年収は全国水準よりかなり低い（一人あたり年50ドル）。従ってベトナム国内でも乳児死亡率は高いほうに位置していた。

このプロジェクトに派遣された専門家の方々、特に助産婦である渡辺一代さんは非常に精力的に活動している。省都ビンの保健センターで定期的に講習会を開いて各村の保健婦を指導する。そのあとは片道数時間の移動を繰り返しながら、19ある郡の保健所の保健婦を訪問し、指導した内容が定着したか視察をして行くのである。細かく厳しいだけでなく、人を元気に明るくするその語り口は、指導を受ける保健婦達の気持ちを前向きなものに変えていく。保健婦達の現場はなかなか忙しく、これまでのやり方を変えていくことは難しかったようだ。しかし熱心な指導のおかげで、ついには保健婦たちも忘れかけていた技術をすすんで復習し、技術の向上に努め始めるようになってきている。



現地スタッフと打ち合わせする渡辺さん
（一番右）

しかし渡辺さん達の役割は単に技術を覚えさせるだけではない。救急車のない地域のために自転車での妊婦を運ぶといった工夫を現地スタッフとともに考えたり、各郡の保健所（病院を兼ねる）をまわっては妊婦達が受診しやすい環境になるように助言したりしていく。また、必要な機材の援助をうけられるように郡や省とJICAの会議で打ち合わせする。開けっぴろげの長屋のようだった建物はカーテンをつけられ、壁の細かな仕切りもつけられて落ち着いた雰囲気のある立派な診療所へとかわった。地域では妊産婦はもちろん、村の婦人同盟や共産党の幹部といったいろいろな立場の方々からも篤く感謝されていた。



自転車で妊婦の搬送を指導
（間に乗っているのは渡辺さん本人）



改善後の診療所の様子

数年前、NHKのドラマ「おしん」がベトナムで放映され、全国で一大ブームとなったそうである。今年、たまたま渡辺一代さんの普段の様子や活動が国営放送で放映された。その熱心な活動ぶりが降く間に話題を呼び、おしんを抜いてベトナムで一躍有名人間になったそうである。

② 熱血日本語教師

ヴェトナムではドイモイ(刷新)という開放経済が施行されて以降、海外からの企業の進出が盛んに行われている。法制度や環境の整備といった問題も抱えているが、学生や一般庶民は外資系の企業に注目している。そんな事情もあって、大学では英語と並んで経済大国日本の言葉が熱心に学習されている。

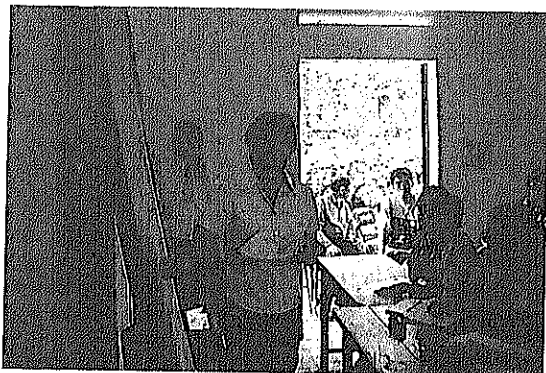
ヴェトナムでは新学期が9月に始まり、6月で終わる。夏休みは学生にとっても自由時間でありほとんどの学生は実家に帰る。しかし、8月の暑いさなかに青年海外協力隊員の井出聡子さんと学生達は教室にいた。そこにいる学生達は夏休み前にすでに卒業しているのだが、近い将来日本語教師として現場に立つために少しでも日本語を正確にマスターしたいと思い、課外の授業を受けていたのだった。



熱心に日本語を学ぶ学生たち

授業では学生が順番に日本語の基本文を読みながら、意味を理解し、自分なりに例文を作っていく。そのあと井出隊員が補足説明をしていく。この授業の最中にたまたま「援助する」という表現がとりあげられていた。似ている表現として「手伝う」、「支援する」とともにとりあげ、それらの違いを説明していた。「『援助する』は物やお金が中心、『手伝う』はいっしょにからだを動かしてという場合が多い。そして『支援する』はどちらの場合もありえる。」といった具合である。果たして通りすがりの日本人にこれらの違いが説明できるのだろうか。こんな細かな説明をし、理解させようとするのである。

この夏休み中の授業が正規なものではない以上、井出隊員にとって、まさに「ボランティア」である。しかし、ヴェトナム人の暮らしに溶け込んで生活する協力隊員にとって、貧しさのなかでも高い学費を払って学習しようとする学生達の熱心さは痛いほどの共感をよぶ。彼らのことを思う時、思わず涙することすらもある。今回の課外授業は、井出隊員が学生達の厚い願いに応えたものだった。



日本語を指導する井出隊員

彼女の本来2年の任期はこのとき、終わろうとしていた。しかしヴェトナム人学生の日本語を学ぶ熱意にふれ、彼女は任期の延長をすでに申し出ていた。

これらは現地で活躍されるスタッフのごく一部のようすである。

ドイモイ政策のもと、ヴェトナム人は試行錯誤しつつ、新しい国をつくらうとしている。リプロダクティブヘルスや日本語教育という事業にかかわるヴェトナムの人々はもちろん、ほかの事業にかかわる人々も围づくりにまい進していた。そしてそれらの熱意に勝る勢いで、現地の日本人スタッフの方々も日々熱心に活動している。

ベトナムの日常生活について

KAZUKO CHIBA

千葉 和子

英語科

中新田町立中新田中学校

I 町並みと交通事情

空港から手配されたワゴン車に乗り込み車窓を眺めると、空港からすぐの所に田圃が広がり、ハノイの市街地までの一時間はどこまでも続く田園風景であった。国道1号線という舗装道路を自動車、バイク、そして自転車が入り乱れ、猛スピードで目的地に向かっていった。貯蓄の習慣のないベトナムでは物で財産を残そうとする為、バイクの人気のたいへん高い。バイクは日本製が多く、ふたり乗りはもちろんのこと4、5人が相乗りし、車以上のスピードを出し駆け抜けていく。豚を棒につるして運ぶバイク、米袋を数俵積んで走るバイクもある。車はクラクションをけたたましく鳴らし続け、対向車線を何度もはみ出しながら突っ走っていく。

市街地に入ると交通渋滞が激しく、信号機と横断歩道はあるがそれとは全く無関係に勢いよく走るバイクや車の間を歩行者はするするとくぐりぬけ、向こう側



へと渡ってしまう。ハノイ、ホーチミンなどの大都市では、交通事故で死亡する人がだいぶ多く、車やバイクの排気ガスと共に大きな社会問題となっている。

農村部の家屋はレンガを土で固めた家が多く、2階建ても多く見られた。ハノイの市街地に入ると高層ビルが立ち並び、大使館や外国人向けのホテルは立派なものが多い。一般の人々の住む建物にあまり高いものはなく、コンクリート製の2階建てや4階建てのアパートに住む人が多いようである。

ハノイの人口は300万らしいが、登録していない人もおり、日中の労働人口をあわせると、その2倍以上になるのではないかとわれている。とにかく市街地は人が多く、特に子供、若者が多くいて、街全体が活気と熱気に満ちている。人口が多い割には、ハノイは治安も良く、結構きれいな街である。ゴミ収集車が家庭から出るゴミを集めているせいかもしれない。

II 食事

食生活に関しては、さすが東南アジアだけあって食材が豊富であり、値段も日本の10分の1とたいへん安い。ちなみに、米はキロあたり25~70円程度である。市場に行くと、肉や臓物（トリ、ブタ、牛、アヒル）、魚（ナマズやライギョ等の川魚からアジ、タイ、マナガツオ等の海魚まで）、イカ、エビ、カニ、各種貝類、各種野菜やハーブ、漬物類、くだものなどがふんだんに並んでいる。ビア・ホイ（ビアホール）や食堂で、もうこれ以上食べられないという位食べても飲んでも、一人500円位である。

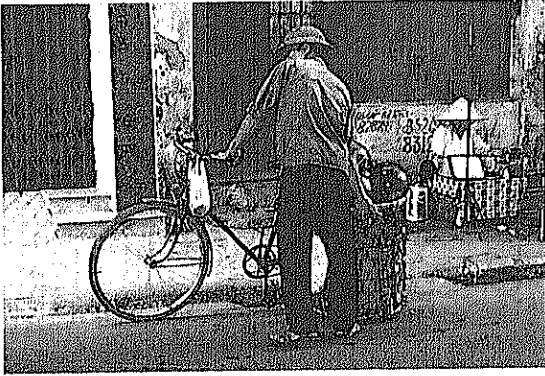


ベトナムは数字の上では一人当たりの GDP（一定の期間内に、その国内で新たに生産された生産物を合計したもの）が240ドルで、統計上は最貧国の中の1つに入っているが、食生活の面では当てはまらないようである。ベトナムを「実体豊かな貧乏国」と評する人がいる。

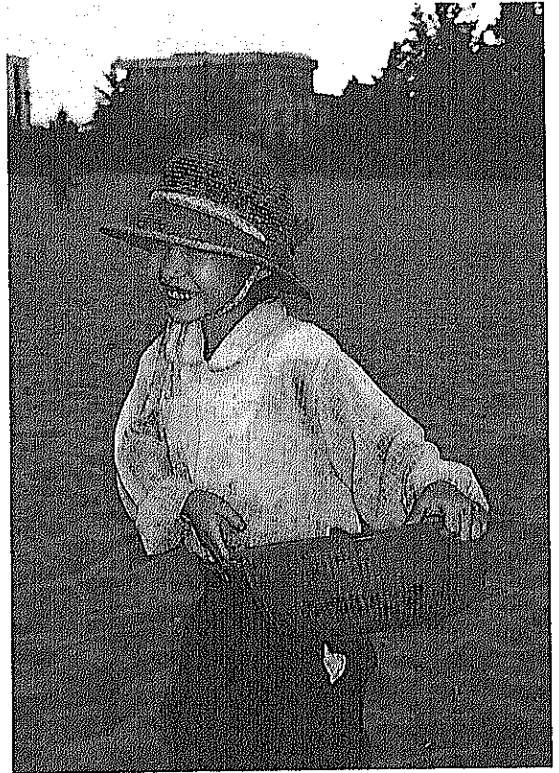
都市部では家族での外食が多く、外にテーブルを出して商売をする屋台の店がそこかしこに見られた。ピア・ホイに行きメニューを見たら、犬肉があるのには驚いた。

III その他（驚いたこと）

・「日本人は世界中で一番の働き蜂」という言葉はベトナムに行き無残にも打ち砕かれた。ベトナムの人々は老若男女、朝早くから夕方まで本当によく働く。農村部では炎天下腰を曲げ、稲の草取りや水やりに精を出している。また、果物や野菜を都市部に売りに行く人々は、夜が明けないうちに家を出て、何十キロという距離を歩き続ける。



・市街地の公園にはものごいがいて、ものごいのプロもいた。座っていると、絵はがきやキャンデーを持って来て、1ドルで買ってくれという。少ない金額を渡すと日本語でけちと言われたりする。ショーウィンドーを見ながらゆっくり歩いていると、あつと言う間にもものごいや押し売りに声を掛けられ、どこまでもついて来る。一日1ドルの収入を得るために彼らも必死なのだろう。地方に行くと、ものごいをする人は見かけなかった。



・ベトナム戦争の傷病兵の鎮痛薬として、半ば公認で使用されていた麻薬が、こどもの食べるお菓子に入れられているらしい。食べれば食べる程、そのお菓子を欲しがるといふ中毒症状で出て来るといふことで、たいへんな社会問題になっているらしい。市街地には注射器や注射針が捨てられていることもある。

ベトナム研修に参加して

HATAKEYAMA YUKO

島山 祐光

国語科
滝沢村立滝沢南中学校

1 はじめに

私はこの夏、JICA（国際協力事業団）が主催する「中学校教師海外研修」に参加し、ベトナムへと旅してきました。この研修旅行は、発展途上国の現状とJICAの発展途上国に対する援助の現場の視察を目的に行われたものです。この旅で私は、人なつこく生き生きとしたベトナムの人たちと、ベトナムの人たちのために力を注がれているすばらしい日本人たちに出会うことができました。

現在、世界にはさまざまな問題があります。各地で頻発する民族紛争、世界的な経済の低迷、環境や人口増加などの地球規模の問題など、地球社会は大きな変動の時代を迎えています。よりよい明日をめざし多くの発展途上国が努力していますが、貧困や経済の低迷の問題は、国づくり、人づくりに大きな障害となっています。

日本は第2次世界大戦後、諸外国からたくさんの援助を受け、高度経済発展をとげることができました。そして経済大国となった今、国際社会の平和のために力を出すことが求められています。日本政府は政府開発援助（ODA）として、多額の資金協力をしています。（1991年から連続して世界第1位）しかし、GNPに占める割合をみると0.2%で、DAC（開発援助委員会）加盟国21か国中19位とけて多いいはいえせん。また、資金の贈与の比率をみても、日本は31.1%でDAC加盟国中最下位に止まっています。

つまり、日本はお金は出すけれど、「国際援助の質」

はまだまだ低いといわざるをえません。そんな日本への国際的な要求として、「もっと技術協力を」「無償資金で協力を」という声が高まっているわけです。

この技術協力（青年海外協力隊を含む）や無償資金援助の事業をつかさどる機関が、国際協力事業団（JICA）です。

2 この旅のテーマ

実は私自身は国際協力に特別に関心があったというわけではなく、日本の中だけでなく外を見てみたい。日本を外から見直してみたいというのが直接のきっかけでした。

日本はたしかに物質的には豊かです。でも、心の豊かさとはまったく別のものだと思います。ベトナムは、GDPの比較によると世界の国の中で最低レベルの貧しい国とされていますが、そこには何か日本人が見失ったものがあるにちがいない。本当の豊かさってなんだろうということを考えてみたいと思いました。また、教師としては子どもたちの様子が一番気になります。そこで、できるだけたくさん子どもたちに会い、子どもたちの顔をじっくり見てこようと思いました。

3 青年海外協力隊の人々の姿から

実際にベトナムで活動されている日本人の方々に出会って、ベトナムの国づくりに汗を流している日本人がこんなにいるんだ。日本人も捨てたもんじゃない！と、日本人であることに対する誇りを感じました。

「国」という枠を越え、その土地の人といっしょになって力を尽くしている皆さんの生きざまにふれることができたのは、本当に貴重な経験でした。そして活動する日本人の周りには一生懸命に働くベトナム人の姿がありました。国籍は違っても社会をよりよいものにしようという気持ちは変わらない。信頼しあって仕事をしているんだと感動しました。

現在ベトナムにいる協力隊員や専門員の数はわずか40数名。国を越えた援助や交流はまだ始まったばかりだという印象を強くもちました。これからもっと人の行き来ができ、協力関係をつくりあげていければいいと感じました。

4 ベトナムの子どもたちから学んだこと

ベトナムの子どもたちと会って感じたのは、みんな「学びたがっている」ということでした。私がベトナムで出会ったのは、「勉強が好き!」「勉強したい!」と素直に声に出せる子どもたちでした。そして、英語を自由に使って話かけてくる子どもたちでした。英語で聞かれたことに対して、英語で答えることのできないもどかしさ!英語さえできたらこの人たちと自由に会話ができるのに!と悔しい思いでいっぱいでした。ぜひ英語を話せるようになりたいものだと思いました。中学生の皆さん、ぜひ英語を習得してください。

観光地では、お土産売りの子もたちにたくさん会いました。外国人と見ると絵葉書やTシャツを買えと、しつこいくらいにつきまってくるのです。いわゆるストリートチルドレンなのでしょう。「要らない」というととても悲しい目をします。私はあの目を見るのがとてもつらかったです。買わないで、何度も「バカ!」と言われました。あの子どもたちはたぶん学校には通っていないのでしょう。

5 各訪問先について

7/30 (金) 午前~JICA 事務所 地曳隆紀所長, 永野年晃調整員

○ベトナムの社会と経済の概況そして教育の現状について説明を受けました。「なるほど現地に来て話を聞くというのは臨場感があっていいもんだ」とひとり感心しながら聞いていました。ベトナムでは北部山岳地域に50をこえる少数民族がいること、フランスの植民地時代に漢字を廃止しローマ字化したこと、そのために途上国としては比較的識字率が高いのだそうです。また、貧困層が富裕層を大きく上回っていること、しかしその富裕層でさえ、一カ月あたりの所得が3,000円ほどであるということでした。

7/30 (金) 午後~ジャパンスタディセンター

○ここではさまざまな専門職に就く若者たちが日本語の研修を行っていました。私たちもその授業に混ぜてもらい、研修生の方たちと話し合いができました。私のグループにいたギエップさんは、日本の学生は将来の夢がない。勉強をしない。とか、学校以外でも自分のことをしない。とか、厳しい指摘をしてきました。さらにベトナムの学生は社会に関心があるが、日本ではどうかという質問もされました。研修生の日本語の上手なこと、そして、詳しく日本を勉強しているということに驚かされました。

7/31 (土) 午前~法務省, 法整備専門家 弁護士 武藤司郎さん

○武藤さんはベトナムの法律を作るための調査やアドバイスをしています。さまざまな問題が山積していて、少しずつしか進められないけれど、ベトナムはやりがいのある国だと武藤さんは話していました。人々が一生懸命働いて、自分が仕事をしただけの手応えを感じることができる。月々国が発展していることがわかるということでした。

8/2 (月) ~VINHへ移動, リプロダクティブヘルスプロジェクト・母子保健センター

○ハノイから南へ約300キロ離れたヴィンという街へ、バスで5時間半かけて移動しました。国を縦断する国道1号線はきれいに整備されていました。車窓には形のみぞろいな田園が広がりヤシやバナナの本も見えます。景色は日本の東北地方にそっくりでした。

「リプロダクティブヘルス」とは「性と生殖に関する健康」のことで、ベトナムの中でも特に貧困で助産婦の少ないゲアン省で、村の保健センターで提供される

サービスを改善し、清潔な環境で、安心してお産ができるようにするのがこのプロジェクトの目的です。ゲアン省では85%のお産が各村にある保健センター(CHC)で行われています。しかし、現状は分娩台がない、床が土間のまま、設備は不十分、雨漏りがするなど、安全が保証されていないのだそうです。また、分娩の技術や妊婦への指導のための知識も不足しています。そこで、必要な機材を入れるとともに、助産婦の再教育を施し、保健センターの設備を改善し、最低限必要な医薬品や避妊器具を供与しているということです。さらに、このプロジェクトの特徴は、JICAとジョイセフ(家族計画国際協力財団)というNGO(非政府組織)が協力して取り組んでいるということです。

ここで、二人の日本人にお会いすることができました。チーフアドバイザーの勝部まゆみさんと助産婦の渡辺一代さんです。現地スタッフとベトナム語でやりとりする姿はお二人とももうすっかりベトナム人になり切っているように見えました。渡辺さんは、テレビの全国放送でもその活躍ぶりが取り上げられ、今やベトナムで一番有名な日本人だそうです。一代さんは毎日のように村々をまわり、助産婦さんに指導をしているのだそうです。一代さんにしっかりやっているねとほめられたいがために助産婦さんたちは前に教わったことを復習してくるのだそうです。短い時間でしたが、お話を聞いているうちに、表情が明るく一生懸命な人柄だからベトナムの女性たちがついていくんだろうなとわかりました。印象に残った言葉は、「このプロジェクトが終わり日本人が去っても前より悪くなることはない。ベトナム人のスタッフが後を継いでいくから。今は日本人として日本の教育を受けたものが、日本人の感覚で活動していくことが期待されている。日本が注目されている」ということでした。

8/3 (火) ~ ヴィン郊外・コミュニティヘルスセンター (CHC)

○ヴィンのホテルで一泊。翌朝、ヴィンからバスで20分くらいの比較的近い距離にある保健センターを訪ねました。そこはこじんまりとした施設でしたが、床はタイルでピカピカで、井戸もトイレも整備されていました。ここで働く助産婦さんたちや人民委員会の副委員長さんも私たちを歓迎してくれました。バナナ

とミネラルウォーターのおもてなしがとてもうれしかったです。

8/4 (水) 午前~ハノイ外国語大学

○ハノイ外国語大学はベトナム随一のレベルを誇る大学です。私たちはちょうど日本語の授業の最中におじゃまさせていただきました。授業をしているのは協力隊の井出聡子先生。参加しているのは4年生を終え、卒業式を控えたばかりの学生さんたちでした。授業の内容は、日本の学校について後輩がまとめたテキストを正しく直していくというものでした。もちろんすべて日本語です。日本人でも説明が難しいことをすらすらと答えているのには驚きました。

8/4 (水) 午後~ハノイ農業大学 強化計画チーム リーダー長 憲次教授

○近郊にあるハノイ農業大学では、九州大学を退官されてからこちらに赴任したという長教授からお話をうかがいました。ベトナムの農業事情は社会主義下での食料自給の行き詰まりを発端とする1986年のドイモイ(刷新)から、ようやく向上してきて、米の輸出高は世界第3位、コーヒーの輸出高も第3位にまでなったそうです。ベトナムの人々はひじょうに優秀だ。人材の開発にもっと援助を集中させてほしいと話していました。「援助は人から」という強い信念を感じました。

8/5 (木) 午前~チュンヴン中学校(都市部)

○街のど真ん中にある中学校は82年前、フランス領時代に建てられた建物で、この日は夏休み中の特別講習が行われていました。ベトナムのトップクラスの学校で、たくさんの政治家や博士を輩出しているのだと、校長先生は自慢していました。ベトナムの先生は転勤がないそうです。夏休みも講習があるので忙しく、また校舎を他の学校と共用しており午後には他の学校の生徒が勉強に来るということです。生徒の将来の夢の第1位は学校の先生、第2位は医者、第3位は技師、専門家だそうです。

8/5 (木) 午後~国立情報処理研修所 安達秀行調 整員

○産業界や教育界の人々がここでコンピュータを学んでいるそうです。インターネットやマルチメディアの研修の中に「発想法」の研修というものもあり、おもしろいと思いました。街角にはコンピュータゲームを

置いた店もありました。携帯電話をもっている人もよく見ましたし、インターネットカフェもありました。日本で20年くらいかかって発達してきたものが、ベトナムではもっと短期間で広まるだろうという印象をもちました。

8/6 (金) 午前～アイモ中学校 (ハノイ近郊)

○生徒数1200、職員数60の大規模校でした。私たちが着いたときはちょうど休み時間で、子どもたちは中庭でボールを使ったり、セパ・タクローをやったり、元氣よく遊んでいました。ハノイなどの大都市では中学校(4年制)までが義務教育になっていますが、その他は小学校5年制までが義務教育なのだそうです。ベトナムでは11月に「教師の日」というのがあって、生徒たちが先生に花をあげたり、親子と先生が交流するそうです。授業の様子を見に行くと、みんな立って、盛大な拍手で歓迎してくれました。

6 日本に帰ってきて

この旅のテーマがどれだけ達成できたかはわかりませんが、日本にいてはわからないことをいくつも収穫できたような気がします。自分が見たのはベトナムの一面のみでしかないと思いますが、少なくともベトナムには希望があり、人々の顔が生き生きとしているように見えました。朝のハノイのバイクだらけの通勤風景が目には焼き付いています。帰国後、東京の朝の地下鉄の中で見た人々の顔は生気がなく、あきらかにベトナム人とは異なっていました。

この旅で私はベトナムが大好きになりました。みんながさまざまな国を知り、さまざまな国を好きになる。この気持ちが広がっていけば世界はよくなっていくだろうなと漠然とですが感じます。

国際協力は、もちろん JICA だけが行っているものではありません。日本にはたくさんの NGO (非政府組織) があり、さまざまなボランティア活動を通して世界の国々に援助しています。JICA と NGO が手を取り合って援助を行う例も出てきています。そして今後は、これからの社会を担う私たち一人一人が、政府や民間の枠を越えた草の根レベルの活動を展開していくことこそが、重要になってくると思います。私も少し

でも世界のことを視野に入れて考え、行動に移せるように努力したいです。

フィリピンコース研修レポート

NOBUO GOMPEI

権瓶 伸夫

国語科

横須賀市立馬堀中学校



7月29日から8月9日まで国際協力事業団（JICA）の開発途上国への援助事業を視察するというでフィリピンに行ってきました。かなり有意義な旅行でしたのでこの場をお借りして報告させていただきます。

マニラについて驚いたことは治安が非常に悪そうということ。（実際に悪いのかどうかは被害に遭わなかったのだからわかりませんが）レストラン、ハンバーガー店、スーパー等のちょっとした商店には拳銃をさげたガードマンがドアの前に必ず立っています。銀行の前のガードマンはショットガンを構えており、現金輸送車には運転席の窓さえ5センチ幅20センチぐらいしかない重装備の装甲車が使われています。そして怖いことに彼らガードマンのサラリーは日給200ペソ（1ペソ＝3円）程度で最低賃金よりわずかに高い賃金で雇われているということです。治安の悪い国はいくつか訪問しましたが、民間のガードマンが全員、武器とファーストエイドキットを腰にさげているという国は初めてでした。

私達のホテルから JICA のフィリピン事務所まで歩いて10分ぐらいの距離ですが専用バスで30分かかって行きました。（それだけマニラの渋滞が激しいのと JICA の職員が私達の安全には気を使っていることを表現したいのですがフィリピンの庶民と距離を置かれることに何となく違和感を持ちました。）

JICA の事務所の入っている建物の入り口でガードマンに ID を見せ、12階に上がると事務所の前にまたガードマンが立ち、受付のカウンターが防弾ガラスに囲まれてあり、インターフォンでやりとりします。10

年ぐらい前に南米で JICA の施設が襲撃され職員が殺された事件や最近ではキルギスで専門家が拉致された事件がありましたが、嚴重にガードされながら援助活動を行なう現実をどう理解、納得するかということがこの旅での私のまず最初の課題となりました。

エイズ対策プロジェクト

マニラ滞在2日目、JICA 事務所を表敬訪問した後、『サンラザロ病院』の敷地内にある『エイズおよび性感染症の検査研究センター』内でエイズ対策プロジェクトの説明を受けました。他の施設でも同様の印象を受けましたが、JICA の派遣する専門家は、それぞれの専門分野で仕事をしてこられた方が定年退職後あるいは30～40代の2～3年の期間、開発途上国の人々の幸せに貢献したいという意欲をもって取り組んでいただけるのでずいぶん充実して仕事をしている印象を受けます。特に理科系の研究部門で働いている方々とは普段おつきあひする機会がないので、私にとってはたいへん有意義でした。

フィリピンにおけるエイズ患者および HIV 感染者は統計に表れている数字は日本より少ないが、実数としては日本の4～5倍、海外出稼ぎ労働者の数の多さや感染率の高さから考えると今後、エイズ感染が拡大する可能性が高い。それでフィリピン保健省の要請により、エイズ対策プロジェクトに対する協力を日本が5年計画であるようになったということでした。

いろいろ説明を受けたプロジェクトのなかでも『セックスワーカーに対する教育プログラム作り』は教育

に携わる者の一人として大きな感銘を受けました。風俗営業施設への実態調査、そこのワーカーへのアンケート調査、保健婦が利用しやすい教材ビデオの製作等、現実的で無理のない活動やそれを支える専門的な技術。私達の性教育のあいまいさと比べると支援すべきターゲットが絞られているので効率の良い仕事がなされているという印象を持ちました。

ビデオ等を見ながらの説明の後、HIVの感染者である夫婦を紹介され、飲物を飲みながら質疑応答となりました。子供が二人いて、その子供は感染していません。生計は寄付等によって立てているとのこと。けっこう明るい印象でやりきれない不幸みたいなものは感じられませんでした。

その後、研究所内を見学し、同じ病院の敷地内にある「自立援助施設」を訪問しました。ここはラモス前大統領夫人らの寄付によって立てられたHIVの感染者やエイズ患者、その家族の収容施設で先の夫婦の子供たちがくたくたなく遊んでいました。目をそむけなくなる患者の姿もなく私達はロビーでPINOY PLUS（ピノイはフィリピン人、プラスは+で感染者もポジティブに生きるという意味）と名付けられた患者たちの団体が作ったTシャツや小物を買うことでわずかながらの援助をしてエイズ対策プロジェクトの見学を終えました。

フィリピン稲研究所（フィルライス）

週末を自由行動で過ごし、8月2日マニラから北へ140キロ、ムニョスという町にあるフィルライスを訪れました。ここは農業中央試験場みたいな所で、フィリピン各地の農業試験場を統括するだけでなく、アセアン諸国の農業研究の交流もおこなっているようです。1989年に22.6億円の無償援助により設立され、その後、日本から専門家の派遣、ならびに日本への研修員の受け入れ等を行なっているという説明でした。

フィリピンの稲作の課題は灌漑や機械化が未発達で、単位面積あたりの収穫量がアジア全体の平均の80%だということ。そして人口増加によって米が自給できず、近年輸入していること。そのため低所得者層はトウモロコシを主食にしているということでした。

また民主革命以後の土地改革やタイやベトナム等の米の輸出国との違いなど、私にはなかなか理解しにくい分野ですが、農業については日本の米作も含めて学ばなければならない事柄の一つと再認識させられました。

昼食を一緒にとりながら日本人の専門家と懇談しましたが、彼らは日本各地の農業試験場から出向してきた50～60代の方々に、いわゆる国際人の臭さがなく、素朴な感じの人達でした。また専門家自身が農民にものを教えるのではなく、カウンターパートと呼ばれるフィリピンの専門家とマンツーマンでコンビを組み、現地で必要なものごとを考えていくという援助のしかたは相手に受け入れられやすいと感じられました。

洪水に会う

フィルライスのあるムニョスという所から宿泊場所のアンヘレスという町まで旅行日程では3時間とありましたが、町を通過するたびに渋滞に会い（フィリピンではいつでもどこでも渋滞という印象）、あるいは到着した日から降り続く雨の影響か、ホテルについたのは8時過ぎ。マニラの31階建てのホテルと違って平屋のコテージが並んで、大きなプールがあったりトレーニングジムがあったり、居心地が良さそうなホテルでしたが、翌日も時間がかかりそうなので朝7時に出発ということなので私は夕食をとってすぐ寝床につき、寝坊した翌朝は朝食も取らずに出発しました。アンヘレスは道路に沿って米空軍の元クラーク基地の跡地が広がり、日本でいうと福生みたいな町並でした。米軍が撤退した原因となった20世紀最大の噴火をしたと言われるピナツボ火山はあいにく雲の中で見ることはできませんでした。

この日8月3日はイバという町に看護婦として活動している青年海外協力隊員を訪れる予定でした。しかし間断なく雨が降り続いたため、道路の両脇の水田は湖のようになり、道路はみるみる冠水してゆきました。そしてイバまで道半ばほどのオロンガボという所の橋の上でとうとう私達のバスはエンジンに水が入って立ち往生してしまいました。初めは道端でエンコした車を助けて臨時収入を得ようとする地元の人たちが押す

のに任せていましたが、人手不足でちがいがあかずにバスの中の男たちは皆、女性に目を閉じてもらっている間に水着に着替え、窓から飛び出してバスを押ししました。新しく購入した水着がこんな形で役立つとは思いませんでしたが…。ちなみに私達のメンバーの構成は男8人女2人。教科では私以外に社会科の教師が5人、英語科が4人でした。ところでこの時、女性の一人が同じように窓から飛び出そうとするのを若い男たちが止めましたが、ジェンダーフリーの立場ではどう振舞うのが正しいだろうか？ 冠水していない所までバスを押し移動させましたが、一度水の入ったエンジンは簡単にかかるはずもなく、また間の悪いことにJICAの職員が持っていた携帯電話もつながらず、彼と何人かで数キロ先の市役所まで連絡を取りに行くことになりました。フィリピンでは民家の電話は地域内でしか通じないとか。救助を求めて決死隊が雨の中を出かけた後、私達は水田から増水した水が徐々に道路の方に上がってくるのを見つめながら、冗談を言って時間をつぶしてました。トイレ（といっても浸水で囲いがあるだけ）を借りに民家へ行った女性が言うには「地元の人によるとこんな雨は4年ぶりだとか。」

1時間後、ブルドーザーが救出にやってきました。私達のバスはブルドーザーに牽引されて市役所まで行き、そこから別のバスでスーピックの町まで運ばれ、またタクシーに乗り換えて元米海軍の基地であったスーピックフリーポートのホテルに到着しました。JICA事務所の判断によって、イバ訪問は取りやめ、明日、水が引き次第マニラに戻る予定とのこと。スーピック基地の跡はヨコスカ米軍基地と趣がよく似ていました。ただ港としての機能だけでなく、滑走路1本の飛行場もその中に備えており、かなりの資本が投じられたことがうかがえられました。士官の宿舎やクラブ等の施設が観光用の宿泊施設に変えられ、ビーチもあり、町の喧噪はシャットアウトされていますが、果たしてどの程度外から客を呼べるのかは疑問です。

翌日、雨の上がった後、昼過ぎにマニラから代わりの車が到着するまでのんびりと散策を楽しみましたが、ヨコスカの米軍基地もこんな形で返還されたら市民としては喜ばしいなと私は思いました。

女性職業訓練センター

四輪駆動車に先導され(冠水した所では牽引されて)マニラに戻った翌日、市内にある女性職業訓練センターを訪れました。ここは「アジア太平洋地域における女性の経済的エンパワーメントを促進し、女性の社会的・経済的地位の向上に資する」ことを目的としていて、職業訓練の施設だけでなく国際会議等のためのホールや宿泊設備も整っている立派な建物でした。

日本から派遣されている女性の専門家は連合の事務局などの経歴を持ちチーフのスズキさん、フィジー滞在中スウェーデン人と結婚されたというラーヘッドさん。どちらも開発途上国の女性の地位向上という有意義な仕事をなされているからか、ずいぶんと輝いており、同行の女性教師からは「かっこいいわね。」という声がこぼれていました。

このセンターで行なわれている職業訓練の分野には服飾、ホテル・レストランサービス、宝飾などの他にジェンダーフリーの立場から金属溶接から自動車整備まで用意されていました。ただ受講料が無料であった1期生132人のうち32人がドロップアウトしたという事実がフィリピンの女性の現実が示されていると思われれます。おそらく訓練修了まで無収入であることに耐えられない貧困が横たわっているのではないかと推察されます。

また警備の厳重さについてスズキさんに問いかけたところ、彼女自身も最初とまどいを覚えたけれど、フィリピンの人たちはたがいに信用しないことを前提として生きており、手荷物検査等を受けることに全く抵抗がないとのこと。また警備員を配置していても備品が頻繁になくなっていくという現実があること等を教えていただきました。

理数科教師訓練センター

女性職業訓練センターを訪れた日の午後、フィリピン大学構内にある理数科教師訓練センターを訪問しました。ここは5年間のプロジェクトがこの5月で終わり、日本人のスタッフはおらず、フィリピンのスタッフによって運営されているとのこと。説明によるとフ

フィリピンの教育において理科数学の教育は遅れており、この施設を使って各地の指導的役割を持つ教師の再訓練を夏休みの間に行っているとのこと。このセンターは4階建てで各種の実験室、ビデオ製作スタジオの他、天体望遠鏡のドームも備えてありましたが、備品や実験機材のほとんどが日本製で、果たしてここで訓練された教師が実際の現場でどのようにしてサイエンスを教えていくのが疑問に思えました。

低所得者向け中層集合住宅

(スモークーマウンテン跡地)

8月6日、アジア最大のスラムとして有名なスモークーマウンテンに建設中の低所得者向けの集合住宅を見学に行きました。ここは以前巨大なゴミ捨て場で自然発火した煙が常に立ち上っているのもその名が付いた所です。そしてこのゴミを拾って生活する人々が住み着き、スラムとなっています。今ではゴミ捨て場は別の場所に移されゴミの山は土がかけられて普通の小山になっており、その脇に5階建てぐらいの団地が作られていました。しかしバスを降りてみると悪臭はすさまじく私達にはちょっと住める所ではありません。日本からは建設省の専門家が派遣されており、集合住宅のノウハウをアドバイスしているとか。

建築中のアパートに入ってみると、真中は吹き抜けになって暑さをしのぐように作られ、分譲されるスペースは六畳ぐらいのリビングにキッチンとトイレが付き、中二階に寝室が一部屋作られています。モデルルームには瀟洒な家具や部屋を広く見せる鏡が備え付けられ、フィリピン版文化住宅として低利のローンで売り出されることになっています。

そして後に倉庫として使われる仮設住宅の群れの方へ行ってみると、先ほどのモデルルームとは雲泥の差の現実を生きる庶民がそこにいます。悪臭の漂う水溜りに半裸の子供たちが遊び、数名の焼死者が出たという火事跡は放置されたままの状態。馬淵海岸^{馬淵}町全体ぐらいのスペースに仮設住宅とバラックが立ち並び、数千人から数万人の低所得者がひしめき合っています。町全体がなんとも言えない臭いに包まれ、一刻も早く立ち去りたいという思いが自然と湧いてきます。

前大統領夫人が支援しているスラム内の職業訓練所みたいな所ではヨーロッパ向けのクリスマス用のブリキの人形を作っていました。作業している人は20名ほどでこの住人全てに仕事を与えるには程遠いものでした。ここで本源的な疑問が生まれます。ゴミ拾いをして生計を立てている者にゴミ捨て場を閉鎖して住宅を安く供給しても、ここに住む人々は何をして生活をしていけば良いのか。フィリピンの社会の基本的な構造(例えば貧富の差や人口増)にメスを入れていかなければいけないのではないかと思います。しかし、そこまで踏み込めばよいなお世話になるし、内政干渉になります。JICAの専門家やNGOのボランティアの方々はこのあたりの無力さをどのような理念や心持ちで乗り越えようとしているのか、なんらかの形で表現してもらえると、教育上大きな参考になると思われま。

Angono National High School

フィリピンの学校制度は6-4制で6年間の小学校を終えると4年間のハイスクール(中学と訳していいのかわかりませんが?)となります。ハイスクールを終えると大学なり専門学校なりになりますが、小学校を出たらすぐ働く子供も多いように感じられます。当初8月4日に私達は現地の学校を訪問する予定でしたが、洪水のためキャンセルとなってしまいました。研修参加者は皆、一番の楽しみにしていたのがっかりしていましたが、JICA事務所の尽力で急遽6日の午後に標記の学校に訪問することとなりました。このハイスクールの規模は生徒数は76クラス4350名、教師数100名のマンモス校。多数の生徒をさばくために2部制をとっており、午前の部は6部から12時まで、午後の部は12時から6時まで授業等をしているとか。JICAはこの学校の校舎を無償援助しています。

スモークーマウンテンを出発した後、私達は時間を節約するために昼食はファーストフードを買い込んでバス内でとったのですが、金曜日の午後ということで市内は大渋滞。3時からの訪問予定が学校に到着したのが5時になってしまいました。セレモニー等は割愛

され、校内の見学と職員からの簡単な説明程度のものになると予想していましたが、ベレー帽をかぶった生徒に案内されて校門を入ると、ブラスバンドが鳴り響き数百人の人々の拍手で迎えられます。レイをかけられ着席して会場を見渡すと屋根付きの校庭（雨天体操場）の正面にステージが作られ、司会の女性がリングアナウンサーのようなハイテンションでわめいています。ステージに向かって中央に私達の席があり、両脇に生徒たちが並んで腰掛け、私達の後ろにはPTA関係か大人たちが席を占めています。「2時間も待たせやがって、ふざけるな。」と私なら思いますが、日本政府の金の力か、もの珍しさからか、参加者の表情には悪意が全くなく心から歓迎し自らも楽しんでいる様子。わけの分からない理由でカリキュラムがグチャグチャになることに一番腹を立てる私達にとって、いくらか救われた気がしました。

学校長、PTA 会長等の挨拶のあと、JICA 事務所のマスト次長が挨拶に立ち日比友好の意義を強調し（たぶん）洪水の際の私達の苦勞を笑いを交えて話し、私達一人一人を紹介しました。私達は立ち上がりて拍手を受けましたが、何となくスポーツ選手紹介のノリでした。一応各自、自己紹介の内容を考えていましたが、この雰囲気の中で下手くそな英語を話さなくてすみ、ほっとしました。その後、しっかりと着飾り化粧したダンス部女子のダンス（民族伝統のもの）と植民地の際のスペインのものが混ざったようなもの）の披露がありました。その際、会場のあちこちで爆竹が鳴らされました。そしてブラスバンドによる日本の曲の演奏が2曲（『さくらさくら』と何か）あり、歓迎レセプションの第1部が終わりました。

レセプションの第2部までの間は授業参観をしましたが、1学級の生徒が50名以上、何故か男女が左右に別れて座っていました。またある教室では照明器具が壊れているのか電燈がついていませんでしたが、薄暗い中で授業を続けていました。こういう教育環境では日本では味わえない苦勞もあるでしょうが、また違う喜び（苦學する生徒を励ます喜び）もあるような気がしました。ところで日本の学校には見られないものとして会場のあちこちにベレー帽をかぶって立ち、私達を案内したり世話をしたりする生徒たちが気になりま

す。話しかけると、Sir づけで返事が返ってきて、皆ずいぶんと礼儀正しい生徒たちです。JICA の現地スタッフに聞くと軍隊の士官を目指すクラブの部員たちといます。日本ではロータリークラブなどの集まりがあると、ボーイスカウトがその世話をしますが、そんな感じではないかと理解しました。思えば前大統領は民衆革命で民衆側に立ったと言え、軍の司令官だったわけで、こんな形で軍隊の影響が教育の中に残っていることにあらためて日本との違いを感じました。

レセプション第2部は広めの室内で軽食を取りながら行なわれました。参加者は私達と教職員代表、PTA 代表、市長代理、近くの学校の校長、それと20名ほどの生徒代表。最初にこの学校のカリキュラムについて難しい説明（私の英語力ではチンプンカンプン）があり、それに答える形でこちらの英語教師が日本の中学生の学校生活について簡単に説明をし、一人一人が用意しておいた挨拶をしました。私の挨拶は次のとおりです。「私は以前フィリピンから来た少年を1年間自分のクラスに受け入れたことがあります。賢く、人当たりも良い少年でしたが、日本語の習得は彼にとって非常に難しく、そのため日本の高校に進学することを断念し、卒業後、叔父を頼ってオーストラリアに渡って行きました。今フィリピンの少年少女とまた出会えてうれしく思います。よろしくお願いします。」けれども、その場では言いえなかった続きがあり、ここで言い添えれば次のようになります。「彼はシドニーに行きましたが、日本にいた間に勉強が滞り、オーストラリアの高校の授業についていけず、フィリピンに戻ったと風の噂に聞いています。どうか、君たち若者がフィリピン国内で勉強ができ、フィリピン国内で良い仕事ができるようなそんな国にこの国がなるように心から期待します。」

自己紹介が終わった後、私達は歓迎されたお礼に『上を向いて歩こう（SUKIYAKI）』を歌い、その後、質疑応答を互に行ないました。日本の教師たちはなるべくフィリピンの生徒と仲良くなり、彼らの夢や悩みを掬い上げて、日本の中学生に知らせたいと考えていろいろな用意をしていましたが、フィリピンの親や教師は日本がなぜ経済発展を達成することができたか、その核心を私達から聞き出し、フィリピンの生徒

の糧としたい。そんな思いが感じられ、言葉の違いもあり、互いに学ぼうとしようけんめいなのだけどうまく噛み合わない、そんなひとときでした。できれば2~3日この学校に滞在して、時間をかけて交流できたらいいなあと思いました。

そして私達一人一人が生徒やPTAから手作りの記念品を頂いて学校を辞去したのは午後8時半。私達を歓迎してくれた生徒たちは真暗な道を帰宅していきま

す。ところで私達のその日のスケジュールはまだ残っており、フィリピン料理のレストランでこれまで視察した施設の専門家やJICAの職員と懇親会をする予定でした。7時から行なう予定で集まっていた専門家の皆さんをこれまた2時間待たせて宴会が始まったのは午後9時、長い長い一日でした。

青年海外協力隊員

8月7日(土)昨日まで公的な視察を終了した私達は、太平洋戦争の激戦地のコレヒドール島への観光の後、5人の協力隊員と夕食を共にして懇談することとなりました。イバにいる協力隊員を訪ねる予定が洪水のためキャンセルとなったので、JICA事務所がルソン島にいる隊員の何人かを急遽呼び寄せてくれました。

青年海外協力隊員というと心身共に頑健な人々をイメージしていましたが、会ってみるとどちらかというとなイブな感じの若者たちでした。話をした順に紹介すると獣医のニシヤマさんはしっかりとした女性で、大学卒業後3年ほど動物病院に勤務した後志願し、ルソン島の南のはずれの方で家畜の病気の予防や治療の研究をしているそうです。マサキさん(男性)は製菓会社を休職してフィリピンに来ており、米などの農作物をより高い現金収入になるような食品に加工する研究を農村に入り込んでしていると。日本での仕事を尋ねるとリストラ等で肉体的にも精神的にも非常につらく今の仕事の方が楽だとか言っていました。不精歴のハラノさんは養蜂を仕事にしていますが、フィリピンの気候に合わず、病気をしてしばらく入院していたとのこと。全ての隊員と話ができるように席を変えて

残りの二人の女性のそばにいくと、二人ともずいぶんと若く、キュートでツルンとした印象。共に農業大学を卒業するとともに協力隊員に応募し、採用派遣されたとのこと。ミヤモトさんは稲作、サトウさんは果樹栽培の協力をしているとか。5人ともマニラからバスで8~9時間の農村に一人でホームステイしているからか、日本語で心の内をおもいきり話せることが楽しいらしく、詮索好きの教師たちのおしゃべりを長時間つきあってくれました。

まとめ

だらだらと長い報告になりましたが、今回の研修で私自身が新しく認識できたものをまとめると次のようになります。

- ・何か意義のあることを為すには政治的通俗的なセレモニーも致し方ない

中学校の教師という社会のひずみとじかに向かい合う現場にいと、箱ものを中心とした国際援助やそれに関わる政治家や政府高官同士のセレモニーは実際の貧民から離れた援助ごっこのように思えていたが、実際に視察してみるとフィリピンの人にとって無駄と思えるものがなく、個人や営利企業でしえないものについて政府や財団がそれなりの機能を果たす必要があると感じました。

- ・どこにでもいそうな普通の青年海外協力隊員

今回5人の現職の海外協力隊員と出会いましたが、フィリピンだけでも61名、世界中で2000名の青年が月々数万円の生活費で国際協力の現場で働いています。これらの若者たちが、だんだんと鍛えられ有能な専門家としてより良い仕事をなしていくと思われま

- ・スタディツアーはおいしいかもしれない

スモークーマウンテンを訪れた際、JICAが一般公募したスタディツアーの人達と合同して見学しましたが、費用を聞いたところ10万円弱とか。参加者たちもそれなりの教養とナイーブさを持っていて一緒にいて居心地が悪くありませんでした。世界の低開発国を旅

行する時はたんなる観光旅行ではなく、政府組織のもので NGO のものでも、このようなスタディツアーを利用すると有意義な旅ができるように思われます。

・次は日本企業の訪問

フィリピンの社会の一番の問題は、知識や技術のある中間層が海外に流出し、貧富の差が縮まらないことと思われます。そこで営利目的とはいえ、实际的にフィリピン国民に仕事と収入を与える企業も開発協力を大きな貢献をしていると思われます。機会があれば開発途上国に進出している企業を訪れ、滞在員の心情や苦勞、地元労働者の実情等を学ぶことができたらと考えています。

注) 馬堀海岸…神奈川県横須賀市にある町。東京湾に面した約1.5kmの海岸線を持つ。人口約六千人。

フィリピーノホスピタリティー

YUKIE MONAI

毛内 雪絵

英語科

横浜市立藤の木中学校

～洪水の中で学ぶ～

"Oh, my god!" 運転手のフレッドの声と共に車はとうとう止まった。昨晩からはげしく降り続く雨が橋を壊し、地面は見る見るうちに見えなくなっていった。遠くのバスケットゴールにつながれた牛はどんどん水位が上がるのにつれて小さくなる。さっきまで田圃だったところももう水しか見えない。こんな光景を見ながら、わたしたちは通信手段も絶たれ身動きがとれなくなった。水をこんなに怖く思ったことはない。

しばらくして、どうしてもトイレに行きたくなくなった私は思いきってすぐそばの家の戸をたたいた。理由を説明すると快くトイレを貸してくれた。停電のため

うそくをともし、家の中はひっそりとしていた。しかし彼女は「この国に来たのは何回目か」と私に尋ねた。初めての訪問であることや、今回の研修の目的を告げると、「春にもう一度必ず来て欲しい。」彼女はいった。一番彼女がフィリピンを美しいと思う時期であるそうだ。「こうしてわざわざ来てくれたのに洪水にあってしまって・・・この国に悪い印象を持たないで欲しい。」という意味のことも付け加えた。「そしていつでも戸を開けて置くから何か困ったことがあったら来て欲しい。寒いから温かいお湯が必要かもしれないし・・・。」

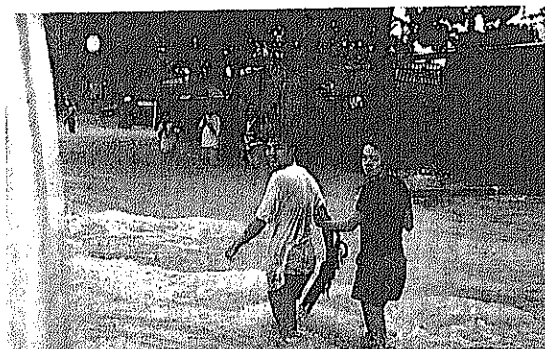
フィリピンの人は情に厚いと紹介されることが多い。(フィリピーノホスピタリティーといわれる。)研修中もちろん、いろいろなところで優しさに出会っ



訪問した学校の生徒たちと



スモーキーマウンテン近くの子ども



洪水の様子



車の中から



洪水のあとの田んぼで魚つりをする少年たち

た。しかしこうして自分の家にも浸水している状況の中で旅行者のわたしたちのことを気遣ってくれたときほど強くそれを実感したことはない。そして国を愛する気持ち。

わたしたちに欠けている部分ではないかと思う。外ばかり向くのではなく、日本に生活するものとしてどう関わっていくか、ということを考えていかなければならない。

予定を変更して宿をとり、一日中ノンストップで迎えに来てくれた車に乗り帰路につくとき、田圃から魚を捕って売っている少年たちをたくさん見かけた。これが「生きていく強さ」なのだと思う。

平成11年度 中学校教師海外研修 ラオス班 研修レポート

YOKOYAMA MACHIKO

横山真智子

家庭科

岐阜市立陽南中学校



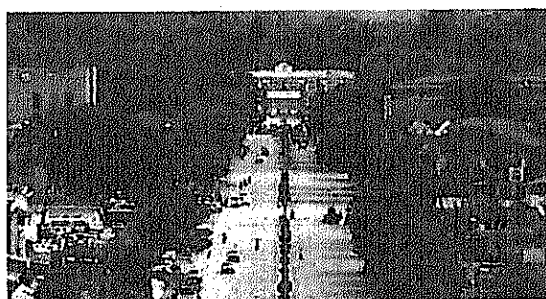
※日常生活について

《街並み》

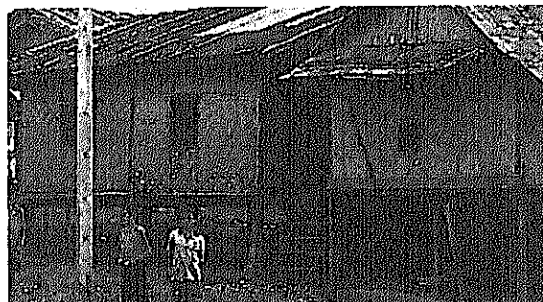
首都ビエンチャンの中心部は、レンガやコンクリートの建物があるが、郊外へ出れば木や竹でできた家々が見られる。高床になっている家が多い。

首都でありながら、自然はまだ残っている。また、いたる所に寺がある。学校や病院などの公共の建物は鉄筋が多い。地方ではフランス統治時代の建物を修繕しながら使用している。

低地ラオの人々は高床式の木製あるいは竹を編んだ住居で暮らしている。モン族はラオ族とは異なった日本の住居に似た家に住んでいる。



【写真1】バトゥーサイ（アーヌサーワリー）から見た市内（南）大統領府が正面に見えます。



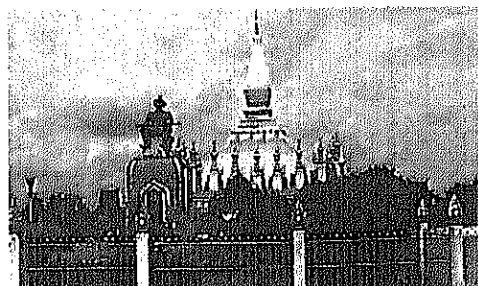
【写真3】高床式の家



【写真4】バクサン高校校舎・門



【写真2】バトゥーサイ（アーヌサーワリー）から見た市内（北）



【写真5】タット・ルアン（ラオスで最大の仏塔）

《服装》

ピエンチャンの女性はシンというスカートをはいている。一見巻きスカートのように見えるが、筒型になっているので、風が吹いても安心である。生地は、綿や絹で手織りのものも多い。



【写真6 市場の様子】



【写真7 村人たち】

《食事》

主食は米である。もち米を蒸し竹で編んだ籠に入れて食べる。米の麺を使ってラーメンのようにして食べる。ハーブを好みで加えたりもする。



【写真8 ラオスの主食-もち米を蒸したもの(カオ・ニャオ)】



【写真9 ラオス風ラーメン】